

コロナの緊急事態宣言が解かれた途端、10月7日夜に地震が発生しました。また、20日には阿蘇山中岳第一火口で噴火が発生し、災害はコロナだけでないことを思い出させました。今回は新型コロナウイルスの現状を簡単に整理した後、地震、火山噴火を思い出していただきます。

<新型コロナウイルスの現状>

・ コロナ感染者数

伊勢原市では、10月8日から10日まで陽性者はゼロ。市内の発生状況は、本年1月は156人、2月は30人、3月は29人、4月は61人、5月は78人、6月は35人、7月は90人、8月は396人、9月は101人、10月はこれまで3人、累計で1,082人です。落ち着いてきたように見えます。近隣の厚木市は累計4,002人、秦野市は1,588人、海老名市は1,982人です。

神奈川県では、10月21日現在で、入院患者135人、宿泊療養18人、自宅療養113人。

累積感染者168,779人、うち変異株患者は35,840人に達しています。

日本全体では、10月22日現在で累積感染者数1,716,088人、死亡者数18,173人です。

世界を見ると、米国では累積感染者4千5百万人（死者73万人）、インドでは感染者3千4百万人（死者数45万人）、英国では感染者860万人（死者14万人）、タイでは感染者180万人（死者1万8千人）、韓国では35万人（死者2700人）、中国では感染者9万7千人（死者4600人）となっています。

・ ワクチンの接種状況

10月21日現在で、1回目のワクチン接種は75.34%、2回目終了は67.94%です。都道府県ごとの差異は比較的小さい状況です。接種後の副反応は、とう痛、けんたい感、頭痛、かゆみ、発熱がファイザー、モデルナとも出ていますが、厚生労働省は「接種体制に影響を与える重大な懸念は認められない」としています。接種が始まる前に懸念材料となっていたアナフィラキシーは、6月の評価では、およそ7万7千回に一件の割合でした。

・ 現状をどう評価するか？（川村孝氏のコメント）

- ・ ワクチンは、接種によって感染が防げるといふより、感染後に体内での増殖と拡大が抑制されるものである。
- ・ 緊急事態宣言（4回実施）と東京都・大阪府の感染者の推移をみると、その相関性が見られない。したがって、感染余地のある所にウイルスが登場すると拡散（クラスター発生）によって流行が始まり、半数近くが感染するとピークに達して減少に転じるというパターンがはっきりしてきた。第5波もデルタ株が感染力が強く急速に拡大・飽和して収束した。
- ・ 非常事態宣言発令中の感染状況から、宣言のような社会施策の影響は限定的で、むしろ国民の衛生意識・衛生行動が流行を規定するように思われる。

<10月7日の地震について>（気象庁発表から）

久しぶりに揺れを感じましたが、伊勢原では震度3でした。関東南部では震度5のエリアもかなりありました。

発生時刻：10月7日22時41分、マグニチュードは5.9、場所は千葉県北西部深さ75km。

発振機構：東西方向に圧力軸を持つ逆断層型

震度：最大震度は5強で、埼玉の川口市、宮代町、東京足立区で観測。

<20日の阿蘇山噴火> (主に巽好幸氏の記事から)

800km以上離れているとはいえ、今年だけでも桜島などの九州の火山や小笠原諸島でも活発な活動が続いています。阿蘇で噴火したから富士山でもというつながりはないのですが、2011年の大震災によって地殻に働く力が変化したので、噴火しやすくなっているエリアが多くなっています。日本列島は活動期に入ったと考え、地震へも備えを固める方が良いでしょう。

<1923年関東大震災>

よく知られているように、1923(大正12)年9月1日11時58分に起きた関東大震災は、震源地は諸説ありますが、神奈川県西部から相模湾で、深さは25kmと推定されています。マグニチュードは7.9です。この地震による死者は約10万5千人にも及び、そのうち9万2千人は火災による死者です。したがって、住宅全壊などによる死者が1万3千人いたことになる。うち、津波による死者200~300人、土砂災害によるもの700~800人でした。火災による被害は、東京本所「被服廠跡」だけで3万8千人がなくなったとされます。

住宅の全壊数は、東京よりも神奈川の方が多かったそうです。神奈川が震源地だったこともあり、県全体で震度6以上であったと思われます。

津波は、相模湾から伊豆半島にかけて、高さ5m以上に達し、熱海では12mだったという記録もあります。また、県内各所で、土砂崩れが発生し、鎌倉が道路の寸断で孤立したり、丹沢や箱根などの山間部ではさらに被害が大きかったようです。

茅ヶ崎の倉見神社にある碑には、132戸中94戸が全壊、38戸が半壊、12人の死者が出た。そして、翌年1月に大きな余震があったと記されています。

伊勢原市内では、大山の山腹に発生した亀裂や崩壊で生じた土砂が谷部にたまり、それが数日後の豪雨により鈴川を駆け下り、山津波となって人家140戸を押し流しました。小規模の土砂流出はたくさんあったと推測されます。震災による市内の死者は128人でした。

また、各種の流言飛語により混乱が拡大したのも事実です。よく知られている「朝鮮人来襲説」だけでなく、「富士山爆発」、「大津波襲来」、「政治家の暗殺」等々です。今は、SNSなどを通じて根拠のないニュースが拡がる可能性がもっと強いので、正しい情報を見極める必要があります。

同地震の余震は、9月1日と2日にM6.1~M7.3の地震が東京湾、茨城沖、千葉沖、静岡県などで発生したほか、翌年1月にもM7.3の地震が神奈川県西部(丹沢地震)で発生しました。

<参考文献>

- ・「関東大震災と神奈川県」名古屋大武村雅之(2013)
- ・「神奈川県内陸中部での関東大震災の跡」名古屋大武村雅之(2014)
- ・「1923(大正12)年関東大震災」(2007)
- ・「地震後の大山の土石流」伊勢原市
- ・「市内警戒区域81ヶ所」タウンニュース(2014)
- ・「関東大震災」吉村昭

.....

新型コロナが広がり始めたとき、ほかの災害が出たらどうなるのか心配しました。関東大震災から約100年が経過しましたが、スペイン風邪も第一次世界大戦も同時期です。災害は同時期に重なって起きやすいものらしいです。コロナの収束を願いつつ、ほかの災害も忘れないようにしましょう。